

問二十二 イ

＊傍線部の「産業」「農耕」について「まったく別」であるとする内容を、各選択肢は「～産業の段階では、～農耕は……になってしまう（になる）」という構文によって置換している。産業と農耕の本文における定義を、各選択肢の構文上の該当箇所に、適切に配置して記述しているものが正解の要件を満たす（記述式と同様の解法）。第一意味段落では、まずは「農耕」についての、「人と土地との結びつきをベースに生存の糧と富を作り出す」ものとする定義が問われる。該当するのはイと、ホの後半である。

＊ホは「個人的消費のための手仕事であった農耕」が不適。

問二十三 ロ

＊傍線部中の「この船は、どんな潮に導かれているのか」という比喻の適切な解釈。まずは「船＝現在のグローバル化した人類世界」が「移動ないし流動」の時代という「転換期」にあって、どういう方向へと進むのかが問われていると読解できる。その答えは、この傍線部の修辞疑問「どんな潮に～？」により、これ以降の意味段落に求められることは明白である。他の設問と問いの内容が重複しているが、「危機意識からの反動ではなく、当然変わらざるをえない」のであり、「未知の状態に積極的に対処する創意こそが必要」となる。この方向性・趣旨に該当し、かつ、「移動」の意味が適切なものは、ロしかない。

問二十四 ニ

＊一見、選択肢は複雑で微妙に見えるが、「どんな～を作り出そうとも、～でないかぎり、～を止めることはできないのだ」という構文の置換であるから、正解答の構文としては、「～したところで、～した以上、～ない」という、出題者によって提示された置換構文の共通性に着眼すれば、解きやすい設問である。いきなり選択肢の細部と本文との一致不一致といった消去法をとれば、選択肢に振り回されるだけであろうが、日頃から自分が答案を積極的に置換して書くという姿勢で学習していれば、時間内で正解を絞れるのである。

＊右の構文上の各位置に着眼した場合、本文中で述べられている定義が適切かどうかと合わせれば、「～を作り出したところで」、「産業化＝自然と人間を切り離す新たな富の生産形態（を前提とした以上）」、「離陸してゆくのを＝より開かれた集合性へと向かう傾向は」、「止めることはできないのだ＝必然的である」と置換でき、**二のみが適切**である。

問二十五 ロ

*空欄Aが「世界各地からの～たちだけの新世界」であるから、ロ「移民」かハ「植民者」である。そこで、Bがロ「起源」かハ「歴史」とすれば、アイデンティティ「神話」は「起源」の神話であり、空欄直後にも「どんな単一の起源や本質にも還元されるもでもなく」とあるので、**ロが適切である**。なお、Cは、このような文脈で素朴な右肩上がりの単線的進歩史観が採用されるはずはなく、ハ「発展」は不適切である。

問二十六

二十世紀に世界的に拡大した産業化は、人間の生存形態の基盤を定住から移動ないし流動へと根本的に変え、個や共同体のレベルであらゆる傾向の反動を呼び起こすが、逆行は不可能であり、一層の混乱と抗争しか招かない。したがって、反近代主義的な危機意識に陥らず、アイデンティティを複合的に形成され、その都度再編成される帰属のバランスととらえ、新たに追求すべきであるということ。(一八〇字)

*「移動の時代」についての、最終センテンスでの提言を一八〇字で説明するのであるから、本文全体の結論の内容説明、すなわち要旨要約である。